

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 日本巫女史(中山太郎著, 大岡山書店発行)   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 國分, 剛二(Kokubu, Goji)  |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1930  |
| Jtitle           | 史学 Vol.9, No.2 (1930. 6) ,p.175(347)- 178(350)  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 書評  |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0175">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0175</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ないかと思はれる。此の鳥海山の圖は『震災豫防調査報告』第五二號の鳥海火山地質調査報告文を参照するのが手近かな事か思はれる。尙又、鳥海山を秋田の人なら「秋田富士」と稱して居るかも知れぬが、私共は「出羽富士」と稱し靈峯として崇拜して居るのである。

是は餘談のやうであるが、『奥の細道』の古版本には、口繪の寫眞版になつて居るもの、他に、字が白く石碑の拓本のやうになつて居るものもあつた、此本は私も所持して居つた事があつたが今はない。尙ほ御存じの事と思ふが、『奥の細道拾遺』と稱する□形本もある、此本は私も所持して居る。次に是は無理な注文であると思ふが『奥の細道』に關する芭蕉翁の眞蹟と、此の資料ともなるべき、翁の句碑と遺蹟の寫眞版を幾らでもよいかから挿入して貰ひたかつた。最近の『芭蕉翁遺芳』などを見るにつれてもつくづく此の感を深くするのである。妄言多謝。五・六・八(國分剛二)

## 日本巫女史

中山太郎著  
大岡山書店發行

日本に於ける巫女の歴史をあきづけることは極めて困難な仕事である。ここに近世に於いては巫女は、賤者の階級に伍し、その記録今日傳はるもの實に寥々たるものである。著者中山太郎氏が、此困難なる問題に處し、不屈不撓よく七三四頁の大著を完成した精力に對しては讃歎せざるを得ない。巫女については「郷土研究」一卷に柳田國男先生が川村杏樹といふ匿名で「巫女考」を發表され

てをるが同雜誌は、極めて稀少であり、世人は此方面の出版を待望してをつた。今や中山氏の「日本巫女史」によつて此缺陷が一時的に滿され巫女關係の資料の一大彙集が出版せられたことは斯學のため悦びに堪へぬ。

日本巫女史の資料蒐集が困難であるのみならず、これを排列叙述することもすくなくからざる手腕を要する。此方面の先達であつた人々もその研究發表は藝術的色彩を帯び、讀者には難解であるが古代人の微妙な心理を寫し出すには獨特の味ひがあつた。本書は、之に反してなるだけ散文的に叙述し、學問的の體系を與へんと努力してをられる。そのため却て生硬な型の中にさらへられ、自由な流動を缺いてをる嫌ひがあるが、讀過するには平易で尋常な讀者にも興味多い長所がある。本書に對して云ひたいことは、著者が既に自ら缺點とされる「發表にのみ急がれてその研究を練る事が出来ぬ點」(巻頭小言一頁)であり、結論があまり早く舉證が充分に讀者を納得させない恨みがある。日本の民俗學は、生誕なほ日淺く、現在のその任務は、消滅する資料をなるとけ正確に記録し後代に残すことにある。あまり論斷をいそいで、これに體系を與ふるのは時機尙早の感がある。また比較的古代にくはしく中世近世に粗なるも材料の性質上止むを得ない結果であらう。今日の狀態に於ては何人もこれ以上の巫女史を纏めることは困難である。本書は、將來完全な巫女史のうちたてられるべき重要な礎石であり、巫女史資料の一大索引として常面の需要を滿すべき好著書である。たゞ二三の不足をさりたてて云へば、著者が民俗學をもつて Ethnology の譯語とし、民間傳承學をもつて folklore を譯

されることである。

最近設置の民俗學會をエスノロジストの會としてしまふにはよいかも知れぬのが、少くとも吾々は、フォークローアを民俗學といふ譯語で呼び、民俗學會は、フォークローアの會の様に考へてをるので同氏の此譯語法には甚だ困却する。殊に自分はフランス流にエスノロジイをもつて未開人の土俗を取扱ひ、フォークローアをもつて日本支那の如き文明比較的進める民族の傳承を研究するものと解してをるので、氏が、民間傳承學フォークローアの名をもつて、民譚の如きかざられた傳承のみを指摘しやうとする態度には、反對せざるを得ない。また氏が、巫道に道教の影響をみさめたり、これをシヤマン教と比較されたりする點にもすくなくからざる不安を抱かせられる。今日道教もシヤマン教もけして充分に研究されてなく、將來その研究にして進めば、これらの宗教がもつて古代アジアの住民に普遍的なものであり、それが形をかへて各所に殘存したものであると證明されるかも知れぬ。今日日本の巫道に弓を使ふこと、人骨を使ふこと、湯立を行ふことなどを道教により支那より受けた影響とすることなど今一層の資料を示して論證されて欲しかつた。東アジアのシヤマニズムの問題は、世界の學界の謎であり、極めて解決困難なものである。今日の吾人の任務は、虚心坦懐その材料を精選提供してもつて將來の學者の利用し組織するを待つべきにあるのではなからうか。(松本信廣)

批評は、以上の如く松本信廣氏が十二分に盡されて居る事と思ひますから、私は之には觸れませんが、巫女といふ者に就いて私

の臆な記憶を辿つて見たいと思ひます。

私が直接に話をした事のある巫女は三人あります。一人は鈴取巫女といつて、農村の祭禮に出張して社のお神樂堂でお神樂の舞を、笛と太鼓に合せて舞うのでありました。此の巫女は夫もあり嗣子もあり、盲でもありませんでした。夫と嗣子の家業は鍼力職で、平常は家に居つて普通人の如く家の始末をして働いて居るのでありました。年齢は五六十才位のお婆さんで、私共と話をするにも別に異つた事はありませんでした。今一人は私の小學時代の學友の母でありましたが、實母であるか否は知りませんが、夫もあつたかと思ひます。此の巫女は盲で口寄や占をする市子でありました。年齢は四五十位かと思つて居ります。今一人は同じく市子の巫女で現在も存命で年齢は四十餘才と思ひます。此の巫女は郷里の家の隣に住んで居ります。家柄も昔より良い系統で、巫女になつたのも私の小學時代か記憶して居ります。で私共の小さい時は眼も見えて居りましたから羽二重の織物會社に通つて居つたのでありましたが、眼が見えなくなるまで鶴岡の北方一里半位も離れて居る文下村ほうだしの巫女に弟子入をして一二年も居りましたが、卒業——免許さいますか、兎に角も師匠の許を得て家に歸り、引續いて巫女を職業としてなか／＼繁盛なのであります。實は此の巫女と今回歸省の際ゆつくり會つて色々話を聞く豫定でありましたが、折悪く洪水の爲め床上尺餘といふ状態で、話どころか會ふ暇もなく、それに私も先を急ぐ旅であつたから此所に數日滞在といふ譯にはゆかぬので、残念ながらも割愛して會はずに別れたのであります。併し此の巫女とは巫女になつてからも始終話を

して居つたから知らず／＼に見聞きして居つた二三の事に就いて  
臆氣にも辿つて見たのであります。

先づ師匠から免許皆傳を得る時は、米貳俵と前金(何程か失念)  
と黒豆等色々の品物を御禮にするのであるさうです。愈々皆傳の  
日になりますと此の黒豆壹升分の數を柄杓ひしやくで水かぶを溶かぶるのであるさ  
うです、だが實際に弱い女が黒豆壹升分の數を浴あびる事は幾ら暑中  
でも出来ないものであるさうです、で助すけと稱して立合人が代理に  
浴あびつてくれるのであるさうです、それでも弱い女は死人のやうに  
なるので、さうなるさ靜かに床に寝かせて休ませるものであるさ  
うです。之で奥の免許も皆傳となれば、各の一人前の巫女となつ  
て業を始めるのであります。先づ家の玄關に注連繩を張つて居り  
ます。巫女の仕事は

- (一) 口寄かみ(神かみ「火の神」水かみの神)の類)の口寄ほこけ。佛ほこけの口寄ほこけさもい  
ふやうです。彼岸になるさ此の口寄が多いのです。自分の一  
家の災害を除く方法や災害の有か否かを聞くのです。聞く時  
は巫女と巫女から聞く人さがあつて、巫女が茶碗に水を入れ  
て佛の口へ即ち何月何日の佛さいふて寄せるのです。さうす  
るさ自分の亡き父母や祖父母等が出て来て色々喋るのです。  
(二) ト占しゆじ(普通に珠數占しゆじさいふやうです。給失物や方角等を占  
ふのです。)

- (三) 神祭しんじんあそび(お水神様祭しんじんあそびせる。井戸の神を祭つて其家または共同  
井戸なら其組或は小字の町村内の災害を除き、併せて火難や  
悪病等の有か否か又は其豫防方法を聞くのです。)
- (四) 六三祭ろくさんまつり(「オツパライ」さもいふやうだ)(自分の家に病人

さか災難があつた時に追拂つて貰ふ事です。此時は御幣を持  
つて拂うやうだ。)

免許皆傳の式や口寄の方法に就いて委しく述べたいのですが前  
にも申した通りの次第で、甚だ簡單なものになつて何等の御参考  
にもならぬ事と思ひます。尙ほ巫女が口寄する時は白い上着を着  
て居りますが手に何を持つて居るか大切な事ですが(梵天「御幣」  
かと思ひましたが)珠數占には珠數を持つて居るやうです。又た神  
棚には神を祀つて居るやうであります何が何神やら知りませんが。  
三人目の巫女は岡山に本部があるさいふ金光教の神も祀つて居つ  
たやうに記憶して居ります。尤も此の巫女の一家は金光教の信者  
でありますから。

巫女の術語さいふてはちと變かも知れませんが、亭主あかえほを赤鳥帽  
子し。家婦かごをへら鳥どり。子こを子寶こたから。(一の寶(長男又は長女)二の寶(次  
男又は次女)孫まごを孫寶まごたから。何月何日の佛さいつて水上あげると其佛が  
出て来て、花江が出て来たさ云へば、花江は巫女の口を借りて喋  
るのです。例へば母が出て来て喋ると、其の依頼人の子はさも眞  
實の母が居つたさ同じになつて問ひ、巫女はそれに對して一々返  
答をしたり、希望を述べたりするのです。之は申し遅れましたが  
巫女に來るのは女が多いと思ひます。私は男が來たのは見た事が  
ありません。それで時間も朝早くから夜遅くまでやつて居るやう  
です。出張はあまり聞いた事はありませんでした。一件に就て料金  
は白米壹升か又は其位の價格の料金であるさうです。尤も珠數占  
は五錢か十錢位らしいのであります。今は如何にや。尙ほ巫女  
の平常の生活は普通さ異つた事がないので、食物も普通家族と異

つては居ないやうです。尤も何か忌むものはありませうが、之は聞いた事ありません。たゞ、入湯中は、珠數占はするが其他はしない云ふ事は聞いて居りました。

茲まで書いた所、中山氏の高著に就いて思ひ出した事がある。それは氏がよく引用される、菅江眞澄翁の『鰐田濃刈寝』に據る、「羽後國鶴岡町の小岩川に近き厚見邊の村里云々」の項であります。之は古い本からの引用でありますから中山氏の誤ではありませんが、鶴岡市なら羽前國であり、小岩川は鶴岡市から十里程も離れて越後國に近い漁村で、今なら山形縣西田川郡念珠關村大字小岩川といふのです。厚見は小岩川に近い同郡の溫海村あつみの事と思ひますが、此の溫海村も海邊の溫海と溫泉の溫海とがあつて、前者を單に大字溫海といひ俗稱は濱の溫海といつて居り後者を大字湯溫海といつて居るやうです。一體古書を其儘引用する地名や距離等に於て甚しき誤謬のある事が少くないので、現在私共が其儘を信用して實地踏査をする時は、さんでもない失敗をする事が少くなくもないのであります、で之は叶ぬ事でありませうが、出来るならば此本には此様に載せてあるが、實際は此様であるを訂正した注意書を欄外か末尾にでも記載されてあるならば、獨り私の喜びのみではないかと思はれます。私は此事に就て氣になつて仕様がなないので若いくせに老婆心さは思ひましたが、つい筆が走つたのであります。妄言多謝。五・八・五。(國分剛二)

英米佛蘭 聯合艦隊 幕末海戰記 (安藤徳器 征共譯)  
大井

日本史を研究する者にまつて外國側にある日本に關する史料の重要なることは言ふまでもないが、特に對外關係の研究、吉利支丹の研究等にまつては外國側の史料は缺くべからざるものである。中でも非常に複雑を極めてゐる幕末の對外關係に至つては外國側の史料の研究に依らなければ、その真相を明にし得ないものが多くあるであらう。近頃多くの人々が日本關係の外國史料を發見し研究する爲に大なる努力を拂はれてゐることは喜しいことであつて、これに依て日本の史料のみでは知り得ない新事實が發見されるに相違ないこと、思ふ。

本書も又此等の努力の賜の一である。即ち本書は Alfred Rassin の著である *The campagne sur les côtes du Japon* の翻譯であつて、大塚武松氏の序に依れば、氏が久しく書肆を涉獵して得ることが出来なかつたが、龜井一高教授がセーヌ河畔の書店で購入されたものであると言ふ。この著者佛國海軍大主計アルフレッド・ルサンは嘗て實際下關砲撃に従事した人であるのを以て見ても本書の價値如何は知り得るのである。この「日本海岸戰記」のあることは以前より知られては居り少數研究家には利用されてゐるけれども所謂珍籍であり外國語である爲に一般には讀まれなかつたがこの翻譯に依て始めて一般の人々に廣く讀まれることが出来るわけである。

本書は著者が一八六三年(文久三年)横濱に到着して以來、一八